

令和 3 年 5 月 13 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K11852

研究課題名(和文)現代アートの「異化効果」に注目した、アートツーリズムによる認知構造転換の実証分析

研究課題名(英文)Research on elienation effect of contemporary art in art tourism

研究代表者

金光 淳 (Jun, Kanamitsu)

京都産業大学・現代社会学部・教授

研究者番号：60414075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、瀬戸内芸術祭の訪問者に関する現地アンケート調査に基づいて、現代アート作品が本来備えている「異化効果」＝「日常性に疑問を投げかけ、感情的同化ではなく日常性を批判的に観察させる効果」を中心に、芸術祭の訪問者がどのようにアート作品を評価するか、アート作品の訪問者に与えるアレゴリー効果を明らかにした。1)産業廃棄物の経験のある豊島調査では、窪地上の公園(コロガル公園)が多くの訪問者に産業廃棄問題を連想させた。また2)ハンセン病施設の島、大島での調査において、島の訪問前と訪問後に連想ネットワークを採取した結果から、ハンセン病問題理解の広がりや深化といった認知構造変化を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コロナ禍によってアート・フェスティバルの中止が相次ぎ、アーティストの活動が制限され、アート活動が停滞せざるを得ない昨今で、現代アートは大きな役割を果たしうる。つまり社会問題を可視化し、閉塞した社会に風穴を開けたり、新しい日常にむけての価値観の構造転換をもたらしうる。この研究はそのような現代アート作品の効果を実証的に示すことでその可能性を示した。

研究成果の概要(英文)：Contemporary art has a unique power that exercises over spectators in various ways. This research sociologically studied how such power could be exercised. Effects of artworks on spectators such as “alienation effect” and “allegorical impulse” were explored by questionnaires conducted in two islands of Setouchi Triennale 2019, Teshima and Ohshima. 1) In Teshima Island, where residents once had experienced illegal industrial waste dumping, we explored how spectators viewed and understood the exhibited artworks on the island. We found that the artists presented artworks using “allegorical impulse” through which spectators could indirectly understand the problem of industrial waste in another way. 2) In Ohshima Island, where Hansen’s disease patients had been segregated for a long time, we detected “alienation effect” of artworks using comparative network analysis on spectators’ cognitive structures between before and after they visited the island.

研究分野：社会学

キーワード：現代アート 社会ネットワーク分析 芸術社会学 アレゴリー効果 異化効果

## 1. 研究開始当初の背景

アート・プロジェクトとは、「現代美術を中心に、1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動であり、作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的現象と関わりながら展開される。既存の回路とは異なる接続/接触のきっかけとなることで、新たな芸術的/社会的文脈を創出する活動」であるとされ、近年様々なレベルで研究されている。アート・プロジェクトは、地域社会というマクロレベルにおいては、地域活性化のために地方自治体と地域経済主体が関与する特殊な公共事業と考えられ、地域コミュニティレベルの社会現象として研究される。そこではアート・プロジェクトによる地域社会の変容、地域再生が焦点となり、経済波及効果や交流人口の増加といった経済社会効果が測定されている。

他方ミクロな個人行動のレベルにおいては、アート・プロジェクトはアート・フェスティバルというイベントや野外展示に興味・関心をよせ、実際に訪問し、地域を巡ってアート作品を鑑賞する人々の観光行動として捉えられる。これらのプロセスは観光行動の態度変容プロセス「認知興味 欲求 動機 訪問(観光) 再訪問 推奨」という行動連鎖としてとらえることができる。しかしこのようなマーケティングモデルでは、現代アートの持つ効果の一つである「異化効果(日常性に疑問を投げかけ、日常性を批判的に観察させる効果)」が無視され、アート・フェスティバルの効果は「再びアート・フェスティバルを訪れたいという欲望を引き起こす」自己循環過程に解消されてしまう。個人の価値観を批判的に転換し、社会変革へと突き動かす現代アートの強力なパワーの源である「異化効果」に注目することは文化活動でもあるアート・ツーリズムの本質を理解する上で新たな視点を提供することに直結する。このような効果を、地域問題を可視化するアート・プロジェクトの中核ダイナミズムとしてとらえ直す必要がある。このような社会学課題に対して、社会ネットワーク分析は強力な分析枠組みを提供する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、アートが本来持つ「日常性に疑問を投げかけ、感情的同化ではなく日常性を批判的に観察させる効果」=「異化効果」を観光学なアート・プロジェクト研究の中核に位置付け、計量的な「文化論的展開」を試みることである。つまり本研究の学術的な独自性は、現代アートによる「異化効果」を操作化し、アートサイト訪問、作品鑑賞による観光客の認知レベルの変化を実証的に明らかにする点にある(図1)。具体的には、アートサイト訪問前と後の観光客サンプルの抽出によりアートサイトに関するコンセプトマップでとらえた認知ネットワーク構造の変化を測定することである。

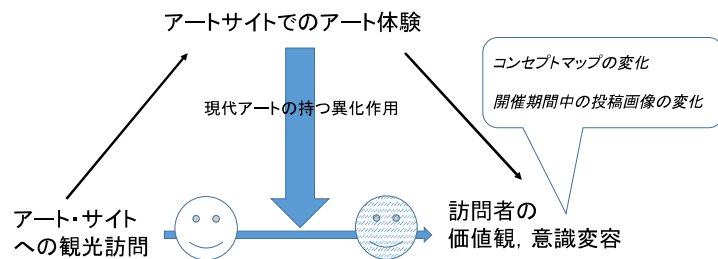


図1 本研究の目的

## 3. 研究の方法

### (1) 豊島調査：アート作品と産業廃棄物問題との関係を探る

瀬戸内国際芸術祭 2019の夏会期期間中にベースとなる小豆島から豊島に渡るフェリー、小豆島から高松港へのフェリー上において、訪問者(観光客、地元民)に対して、図2のような調査場を作成し、観光客なのか地元民か、出身地と現在居住地、産業廃棄物への知識、問題意識があるのか、ないのか。写真による作品の選択3つとその理由、現代アートに関する考え方を尋ねた。

この豊島調査では居住地やアートの意味に関する調査に加えて、写真誘導法という写真で回答を誘導する調査を小豆島から豊島に渡るフェリー船上で行い、豊島展示の全アート作品の公式写真一覧から「産廃問題」を連想させる作品を選ばせた。

Q1 あなたは地元民ですか、(瀬戸芸の)観光客ですか？あてはまるものを一つだけお選びください。

- 地元民  観光客  2010  2013  2016 にも来た
- どちらでもない(帰省、商用できているなど)

Q2 あなたの出身はどちらですか？ また現在どちらにお住まいですか？都道府県と市町村でお答えください。

出身

お住まい

Q3 豊島にはかつて産業廃棄物問題があり、現在もその影響が残っています。あなたと豊島の産廃問題との関係について当てはまるものを選んでください。複数回答可能です。

- 初めて知った。全く知らなかった。
- 聞いたことはあるが、詳しくは知らない
- 学校などで教えられたことがある。
- 地元民として周りの人から聞いてかなり知っている。
- 親戚などが産廃撤去要求運動に関わった。
- 産廃撤去要求運動に関わった。
- 現在も産廃撤去問題の伝承活動をしている。

Q4 豊島の産業廃棄物問題を感じさせるアート作品を「写真リスト」から3つまで番号を選んでください。できればその理由も簡単にお聞かせください。

Q5 「写真リスト」で示したように今回豊島のアート作品には新しい作品がいくつかありますが、あなたはどの程度ご存知ですか。一つだけ選んでください。

- 初めて知った。全く知らなかった。
- 知ってはいるが、詳しくはない。
- 注目していて、ぜひ見て見たい新作品がある。(番号をお願いします。)

Q6 率直に現代アート作品とはどんなものだと思いますか。そう思いいなるものはいくつでもお答えください。

- 1 なんだかよくわからないもの
- 2 美しいもの、神聖なもの、真実なもの
- 3 人生、生命、社会のはかなさを感じさせてくれるもの
- 4 地域や社会の記憶を表現したり呼び覚ましたりしてくれるもの
- 5 今まで経験したことない驚きと感動を与えてくれるもの
- 6 自然の力を感じさせてくれるもの
- 7 日常の見方、価値観に疑問を投げかけ、新たな見方、価値観を与えてくれるもの
- 8 観光客を呼んでくれる観光資源
- 9 事業に関わり、収入源として生活を支えてくれるもの
- 10 地域を有名にし、地域の誇りを与えてくれるもの
- 11 地域に混乱や渋滞をもたらす迷惑なもの
- 12 アーティストとの交流を促してくれるもの
- 13 新たな発想、インスピレーションをもたらしてくれるもの
- 14 社会とのつながりを確認させてくれるもの
- 15 地域社会、社会変革を促進するもの

記入者氏名
日時
M F
Y
M
H
S

図2 豊島調査の調査票

(2) 大島調査：アート作品とハンセン病問題との関係を探る

瀬戸内国際芸術祭 2019 の秋会期期間中(11月)には、オランダの著名なアーティストであるクリスティアン・バステイアンが大島に映像インスタレーションを展示し話題となっていた。また青松園にはハンセン病や施設をテーマとする数々の生々しい作品が展示されていた。

そこで高松港から大島(青松園)行きのフェリー乗船時にランダムに調査票を配布し、大島訪問を経て高松港に帰港時に回収した。調査では、図3のように、ハンセン病と大島青松園の2つを起点とし、概念、キーワード、感情などを発散的に3段階まで連想してもらい、図に記入してもらった。

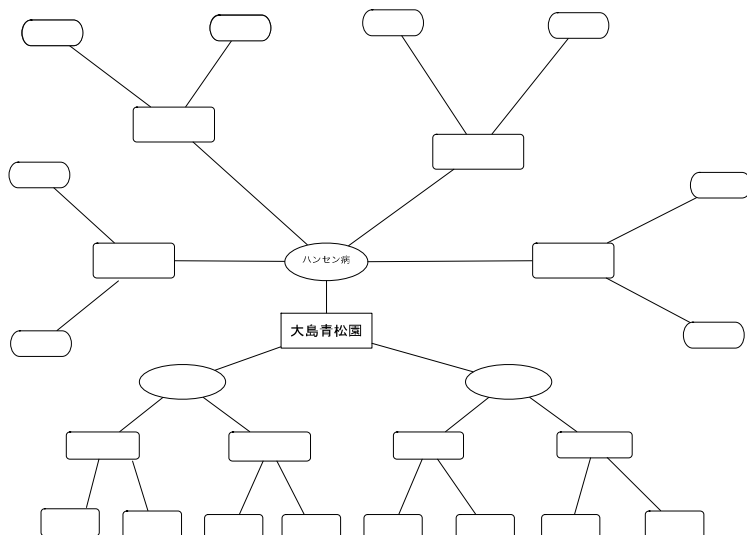


図3 連想ネットワーク記入フォーマット

#### 4. 研究成果

##### (1) 豊島調査研究成果

豊島の17のアート作品の1 豊島愛ランドスケープ；2 豊島横尾館；3 針工場；4 ウミトタ；5 豊島シーウォールハウス；6 コロガル公園；7 トムナフーリ；8 空の粒子；9 あなたの最初の色；10 島キッチン；11 ストーム・ハウス；12 ささやきの森；13 豊島美術館；14 勝者はいない-マルチ・バスケットボール；15 心臓音のアーカイブ；16 豊島八百万ラボ；17 遠い記憶、であるが、このうち、豊島の地域問題をテーマとしているのは大竹伸朗による作品3「針工場」塩田千春の旧「遠い記憶」の新作バージョンの作品17ある。これに加わった新作「コロガル公園」(作品6)は評価が定まっていない状態だった(写真1)。



写真1 産業廃棄物問題を連想させた代表的作品

図4でまとめられたように、調査の結果(全回答者160人、商用訪問者17人を除く)地元民(78人)と観光客(65人)では明らかに異なる作品の選択分布が見られた。地元民では作品6と17に分かれる傾向が見られたが、(ガイドブックである程度作品を学んでいる)観光客では作品6の選択は多くなく、地元民で少ない作品3の選択が多かった。作品17は、住民、観光客ともに廃材やゴミのイメージから選択されていた。

観光客と産業廃棄物問題への関与度の高い地元民の間に大きな作品選択のパターンの違いが見い出せた。選択理由の分析から、地元民では作品6の「コロガル公園」の窪んだ形状が産業廃棄物場を直接的に連想させることで多くの選択を集めたことが分かった。他方観光客でも作品の「土っぽさ」「ゴタゴタ感」が作品6の選択を促したことがわかった。この作品の作者のインタビューから「遊び場」として仕上げた作品の隠された意図としては産業廃棄物現場を意識していたことを確認している。これは子供のマルチメディア体験場として山口情報芸術センターの屋内施設を豊島では野外に作成したものであり、産廃問題に関して、調査者の介入によって、アプロプリエーション/サイト・スペシフィシティ/非持続性/集積/異種混淆化といった手法でアレゴリー効果を訪問者に与えているのである。

しかしながら台風接近により調査の中断を余儀なくされ、サンプル数が少ないまま終了した。さらなる追加調査を20年に予定していたが、コロナ禍で中止を余儀なくされた。

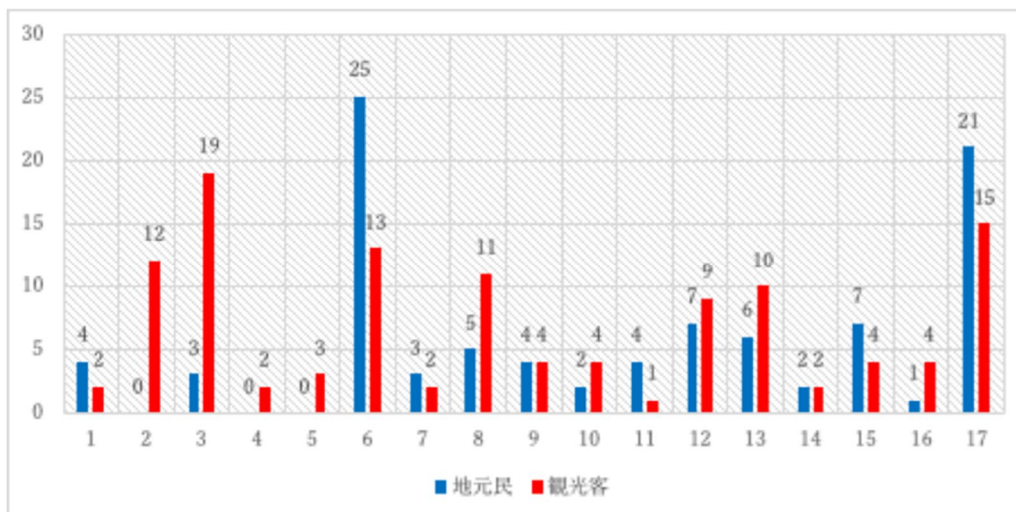


図4 産業廃棄物を連想させる作品の選択パターン(横軸は作品番号、縦軸は選択数)

## 2) 大島調査研究成果

すべての連想イメージは、ネットワークとして可視化された(図5)。大島青松園訪問前の連想イメージは、図5上のように断片的なものも多く、大島青松園とハンセン病からの距離2の連想に留まっていたが、大島青松園訪問前の連想イメージは図5下のように距離4まで広がっていた。また訪問前のエッジ数は251、ノード数は198、訪問後のエッジ数は315、ノード数は234であり訪問後では明らかに連想イメージは膨らんでいる。内容をやや詳細にみると、訪問前後とも「隔離」や「差別」の連想が強く、「ハンセン病 隔離 差別」のネガティブな「トライアングル」が核を形成しているが、訪問後では訪問前にはなかったような「安心」や「安全」、「未来」といったプラスの言葉が出現する。また現地での作品鑑賞や説明によって「文化賞受賞者が差別して閉じ込めていた」や、「法律が最近改善された」などの具体的な連想も出現する。また「伝染」や「感染」の言葉が訪問前より訪問後では減り、訪問後は「今は治せる病気」や「うつるといわれていたがうつりづらい」といったポジティブな表現も出現する。これはハンセン病への理解が具体的に深まったことを裏付けている。これは「異化効果(日常性に疑問を投げかけ、日常性を批判的に観察させる効果)」が働いていることを意味する。

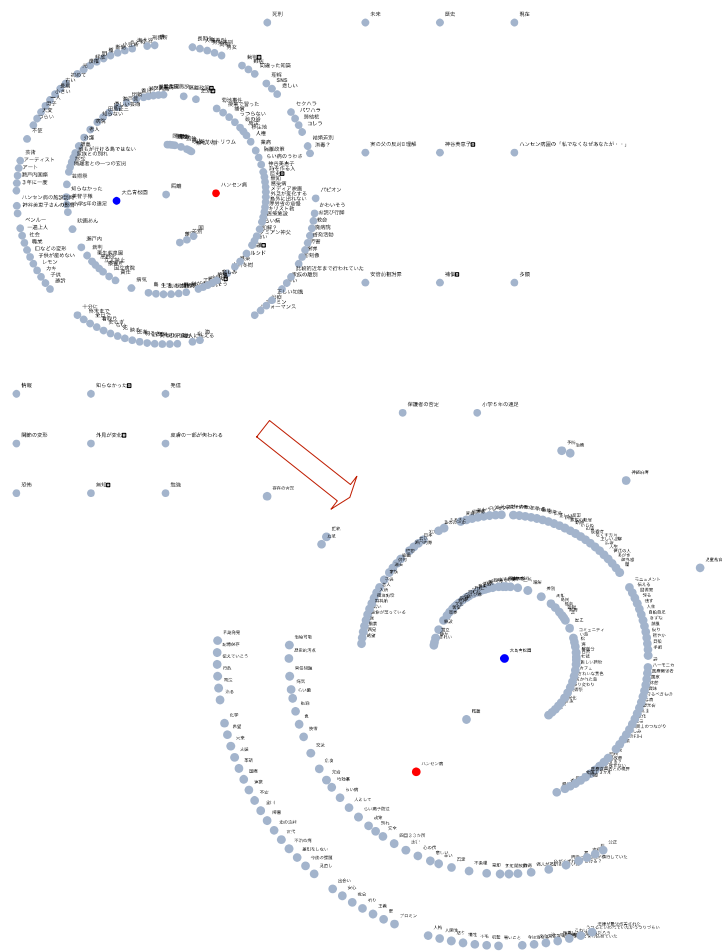


図5 ハンセン病と大島青松園からの連想ネットワーク(上・訪問前、下・訪問後)

この調査により、今回の研究の最も重要な目的であるアートサイト訪問前後の鑑賞者に関して認知ネットワーク構造変化を測定することができた。しかし、これは十分なサンプル数とは言えず、さらなる追加調査を20年に予定していたが、コロナ禍で中止を余儀なくされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金光 淳	4. 巻 1156
2. 論文標題 無形資産算出を担う創造階級の空間的編成とその効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岩波『思想』8月号	6. 最初と最後の頁 133-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金光 淳	4. 巻 34
2. 論文標題 創造的企業ソーシャルキャピタルを生み出す企業メセナ：アート・フェスティバル協賛の経済社会学的分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都マネジメントレビュー	6. 最初と最後の頁 27-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Jun KANAMITSU
2. 発表標題 A brand associative network analysis of Setouchi Triennale: How does the art festival represent self-images and regional problems of the islands through “tourist gaze”,
3. 学会等名 International Conference on Social Network Analysis XXXVIII（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金光 淳
2. 発表標題 企業のアート・フェスティバルの協賛構造とメセナ行動の分析 文化芸術立国のための企業ソーシャルキャピタル形成に向けて
3. 学会等名 2019年度組織学会研究発表大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金光 淳・林イラン
2. 発表標題 Instagramのハッシュタグを利用した観光地表象の研究 社会ネットワーク分析の利用可能性と課題
3. 学会等名 第8回観光学術学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金光 淳
2. 発表標題 アート作品の社会的調査は いかにして可能か?: 瀬戸芸におけるインスタレーション作品の介入的評価分析
3. 学会等名 第93回日本社会学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金光 淳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 253
3. 書名 「3密」から「3疎」への社会戦略 ネットワーク分析で迫るリモートシフト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関